

訃報は
午後

一時に届く

夏樹静子





文春文庫

184—10

訃報は午後二時に届く

定価はカバーに
表示してあります

1986年4月25日 第1刷

1987年5月15日 第2刷

著 者 夏樹静子

発行者 西永達夫

発行所 株式会社文藝春秋

東京都千代田区紀尾井町3—23 〒102

TEL 03・265・1211

落丁、乱丁本は、お手数ですが小社営業部宛お送り下さい。送料小社負担でお取替致します。

印刷・凸版印刷 製本・加藤製本

Printed in Japan
ISBN4-16-718410-9

文 春 文 庫

訃報は午後二時に届く

夏 樹 静 子

—

文 藝 春 秋

訃報は午後二時に届く／目次

夜半の声

7

午後二時のチャイム

219

丹沢カントリークラブ

21

一本の指

245

雨上りの屍体

41

霧と影

262

動機と機会

65

急転回

286

証 拠

87

死者の犯罪

309

樹園の別離

111

面 影

329

失 踪

133

再び、夜半に

365

毘の女

151

幻の逃亡者

408

田沢湖

180

暁の流離

441

擬装自殺

201

黄昏の邂逅

479

解説 権田萬治

495

訃報^{ふほう}は午後二時に届く

夜半の声

I

夜が更けても、雨は小降りになる気配もなかった。秋霖しゅうりんというのか、このところ陰鬱な小雨模様の日が多かったが、今日の午後には低気圧が通過したらしく、風が出て、雨も一段と強くなった。夜に入って風はおさまったものの、冷たい雨がまだしきりに降り続けている。

部屋の空気が冷たい。それは一日人氣がなかったせいでもあるが、今夜はことさらに冷えこんでいるようだ。十月初旬というのに、低気圧のあとに季節外れの寒さが襲ってきたのかもしれない。

三十分ほど前に帰宅した大北耕介は、ネクタイをゆるめただけの背広姿のまま、椅子に腰をおろして、煙草をふかしている。

世田谷区砧にある彼の家の中は、今ひっそりと静かだった。彼がいるのは、いちばん奥まった寝室の続きの、夫婦の居間兼更衣室といった部屋なので、手伝いの老婆も用がなければ近付いてこない。夕食は出先ですませてきたし、お茶もいらないとさっき断わったから、彼女は自室にひっそんでいるようだ。妻の志麻子は、二、三日前から茅ヶ崎の実家へ帰っている。貧血

症で身体の弱い志麻子は、子供もいないので、何かと口実をもうけては実家に帰ることが多い。大北も、大抵それを許している。実のところ、仕事で頭が詰っている時には、妻がそばにいないほうが煩わしくなくていいというのが本音であった。

時たまロックのような音楽がかすかに聞こえてくるのは、下宿人の内藤英夫が自室でレコードをかけているのだろう。植木屋だった大北の父親の下で長年働いていた職人の息子で、今年の春高校を卒業すると、現在大北が社長をしている若芝造園に入社した。自宅が埼玉県の外れなので、頼まれてこの家に下宿させているのである。妙に片意地なところもあるが、平生はおとなしい青年で、大北が帰ってくると、テレビやレコードの音量も低くする。ことにこの夏頃から、若芝造園の経営が逼迫^{ひっばく}して、大北がいつもむずかしい顔をしているのを見ると、家の中では息をひそめているような感じだった。

大北は黙然とすわり続け、ガラス戸越しに暗い庭先へ目を注いでいる。いつかレコードも聞こえなくなると、軒に当る雨の音が耳についた。しだいにその音が、真空になった頭の中に落ちてくるように感じられた。彼はたえず、会社の内情や資金繰りのことなどをくり返しくり返し考え続けているのだが、思考は堂々巡りでまた同じところへ戻ってくるので、結局は何も考えていないのと変りなかった。

深い息を吐いて、彼はようやく腰をあげた。上着を脱いで洋服簞笥にかけ、鏡に写っている自分の顔を眺めた。彼は造作のはっきりした力強い容貌をしていたが、その顔は三十九歳という年齢よりかなり老けて見えた。

その時、寝室で電話が鳴った。彼は棚の上のデジタルへ目を走らせた。青く光る文字が十時

三十七分を示していた。

大北は寝室へ入り、ベッドの脇にある受話器を取った。耳に当てると、「ブーッ」という音が鳴ったので、公衆電話からだと思われた。続いて、

「もしもし」と、低い女の声が呼びかけた。

「渡辺さんでしょうか」

「いや、ちがいますが」

「え？」と相手は吃驚したように訊き返した。

「渡辺さんじゃないんですか」

「ちがいます」

「あの、416の329×では？」

「いや、こちらは327×ですが」

「ああ……」

相手はまるで悲鳴に近い嘆声を洩らした。

「まちがえたんですわ、私、目が悪いもんですから」

口走るようにいった。低い声で、発音にはどこかの地方訛りがからんでいた。

「それはどうも」

大北が少し間をおいてから、切りかけると、

「あっ、待って——」

追い縋るような声が、離れた受話器から流れてきた。彼はまた耳に当てた。

「あの、ほんとに申しわけないんですけど、そこから渡辺の家に電話をしていただけないでしょうか。実は十円玉がもうなくなつて……近くに店もないし、私、ちよつと目が不自由で、それに……」

苦しそうに息が乱れている。

「ああ……いいですよ、何番ですか」

「416の329×です」

大北はその番号を書き取ろうとしたが、あいにくメモ用紙がそばになかった。

「渡辺さんですね」

「私は竹下といえます」

「竹下さん……それで、先方には何と伝えればいいんですか」

「私……あの、ここは大きな教会のそばにある電話ボックスなんですけど、そこにいるから、迎えに来てほしいと……」

「どこの教会ですか」

「さあ……広い道路から曲つて、ずっと来たところの、寂しい通りで……」

「その通りの名前か、町名はわかりませんか」

「ええつと……なんかむずかしい名前だったみたい……」

必死に思い出そうとしているようだ。加減でも悪いのか、喘ぐ^{あえ}ような息遣いが伝わってくる。

「その辺に書いてありませんか」

「ちよつと見て来ます」

電話口を離れた女は、なかなか戻ってこなかった。大北は電話が切れるのが心配になり、軽い後悔も覚え始めた。教会のそばとだけ、先方に告げればよかったのではないか……。

やっとまた、女の声が聞こえた。

「ひもんや」

「ああ、碑文谷ですか」

「大きな白い教会で、屋根の上に十字架の電気がついてます。その横の電話ボックスで待つてからって……お願いします、私、ちょっと困ったことに——」

三分間の通話はそこで途絶えた。

大北が受話器を置いたあとで、もう一度「チン」と電話が音をたてた。それは、手伝いの老婆がダイニングキッチンの受話器をいじったことを物語っていた。彼女も今の電話を聞いているたのかもしれない。

妻の実家の遠縁に当る矢沢トメは、近い身寄りがないとかで、もう九年ほどもこの家に住込みで働いている。六十六歳になるが、めったに風邪ひとつひかず、身体の弱い志麻子を助けてくれるのは結構だが、時折電話を盗聴する癖があった。大北は一度きびしく注意したことがあり、しばらくはなりをひそめていたが、またたまにやっているようだ。さしたる実害もないので、大北はあきらめて放置していた。

彼は再び受話器を取りあげ、今しがた聞いたナンバーをダイヤルした。ここの番号とは下二桁がちがっていた。電話はすぐに繋がった。

「渡辺さんですか」

「いえ……山岡でございしますが」

主婦らしい感じの声が答えた。

「渡辺さんじゃないですか」

「いいえ」

「おかしいな」

大北はナンバーを確かめた。こちらが回したナンバーにはちがいがなかったが、先方は渡辺ではないし、そんな人も来ていないと答えた。

「では、竹下さんという女性をご存知ないですか。地方から出てきたみたいで、目が悪いらしいんですが」

「いいえ」と、相手は少し迷惑そうに語尾を吊りあげた。大北は謝って切るしかなかった。

下一桁と二桁の数を逆にしてしまったのかもしれない。彼はすぐに思い直して、再びダイヤルを回した。

「もしもし、渡辺さんですか」

「いや、ちがいます」

今度は年輩の男の声だった。大北はまた相手の番号を確認し、さっきと同じ問答をくり返した。やはり無関係な相手らしかった。

大北はいささか当惑した気持になった。自分が番号を聞きちがえたのだろうか？ すぐに控えればよかったのだが、あいにくそばにメモ用紙がなかったのだ。正確に聞いていても、その後相手の名前や、電話ボックスの位置など尋ねているうちに、記憶が紛れてしまったともいえ

る。四桁の数字は、頭の中で考え直すと、よけいあいまいになってきた。——いや、局番もちがっていたのかもしれない。

彼は、局番を変えたり、紛らわしい数字を組み合わせて、あと三回ほど掛け直してみた。一つは応答がなく、ほかでは否定された。

腕時計を見ると、もう十一時近くなっている。

「しようがない」

彼は口に出して呟き、投げるように受話器を置いた。

風呂へ入るために、寝室を出た。

居間のカーテンを閉めかけたが、ふとその手を止めて、雨の降り続く暗い庭を眺めた。寒々とした電話ボックスの中で立ち尽くしている女の姿が、妙にありありと視野の先に浮かんできた。さっきの電話の女性の話し方には、どこかの地方訛りが聞き取られた。目が悪いといっていたから、なかば手探りでダイヤルを回したのかもしれない。それでまちがえてしまったのだろうか？

田舎から出てきた女性が、道に迷って、親戚か知人宅に救いを求めているような印象を受けた。

いや、何かもっと深刻な事態が発生していなかったとも限らない。「お願いします、私、ちょっと困ったことに——」と彼女がいかけた時、公衆電話が切れてしまったのだ。低い声で、ゆっくり話していたが、喘ぐように苦しそうな息遣いも聞こえた。怪我や急病という場合もありうる。

大北は少し落着かなくなった。彼女は彼が電話を取り次いでくれたものと信じて、ボックスの中で待ち続けているだろう。ところがこちらのミスで伝言は届いていないのだから、いつまでたっても誰も迎えにいくはずはない……。

彼はカーテンを閉めて、ゆるめてあったネクタイを外した。

まあ、それほど重大に考えることもないだろう。そのうちにあきらめて、どうにか一人で帰るのではないか。どこかでコインに両替えして、今度は正しい番号に掛けるかもしれない。万一またうちへ掛けてきたら、もう少し詳しい事情を聞いてやるのだが――。

彼はネクタイを椅子の背にかけて、ひとまず煙草に火をつけた。

人気の絶えた寂しい道路と、青白い光を孕^{はら}んでポツリと立っている電話ボックスが、再び彼の脳裡に浮かんた。

最近はずいぶん手のこんだイタズラ電話もあるらしいから――。

だが、単なるイタズラにしては、女の声はひどく切迫していたのだ。

「碑文谷」といつていた。大きな白い教会も、およそ見当がつく。目黒通りに沿った碑文谷の一带に、彼はある程度土地カンがあつた。あの辺は夜、非常に寂しい。

彼は煙草を吸い終り、腕時計を見た。十一時九分。

ちよつと行ってやろうか――？

ここから車でなら、十五分あまりしか掛らないだろう。

まさか、そこまでする必要はない。また出掛けるのは億劫だし。今の自分は、それどころではないという気持も、彼の意識の底に流れていた。

とはいえ、今日はもう、自分にできる仕事は何も残っていない。あれこれ考えあぐねて、寝つかれない夜が待っているだけだった。

2

大北は多少上の空の感じで、パジャマの入っている引出しを開けた。

(電話の女性は、目が不自由だといっていた)

そのことが、彼の意識にくいこんでいる。それは遠い過去の記憶に繋がり、知らず知らずにかすかな疼きを喚びおこすような事柄だった。

彼女はまだ、寒い電話ボックスの中で待ち続けているだろう……。

彼はパジャマを出さないまま引出しを閉めて、代りに洋服箆笥を開け、ハンガーからジャンパーを外した。

ちよつと様子を見に行つてやろう。大した距離ではない。いつまでも気にかけているより、そのほうが簡単ではないか。

ワイシャツの上からジャンパーを羽織って、彼は心を決めた。

玄関へ出ると、台所の横の小部屋から、矢沢トメが小柄な姿を現わした。洋服の上に毛糸の羽織を着ている。

「またお出掛けですか」

妻の実家の遠縁に当るトメは、いつもなんとなく大北の行動を見張っているような目付きをしている。もしさっきの電話を盗聴していたなら、トメもナンバーを聞いていたかもしれない